

概念の両極で二重化され、その意味を変容させた運動であったのである。

## 〈考古学コース〉

### バーミヤーン石窟の研究

(1) 本稿では総体的な現象としての「アウトノミア」とグループとしての「アウトノミア・オペライア（労働者の自律）」を区別する。

(2) 「アウトノミア・オペライア」の有名な理論家の一人。

(3) 社会運動の社会学の見地によれば、「アウトノミア」の運動は三つの分類、すなわち①伝統的な「階級闘争」的な労働運動、②「新しい社会運動」、あるいは③その過渡期の運動のいずれかの分類で考えられる。本稿では③の視点をとる。

(4) 「周縁者」とは女性や性的マイノリティ、あるいは非正規労働者や失業者といった標準的な労働者に還元されない主体を指す。

〈はじめに〉

「石窟群の機能的分類」

ナワビ アハマッド 矢麻

バーミヤーン石窟は、アフガニスタンを横断するヒンドークシュ山脈の山間、標高約二、五〇〇mに位置する。アフガニスタンは現在イスラム国家であるが、バーミヤーンの地には五世紀から九世紀にかけて、仏教石窟が営まれていた。バーミヤーン大崖と呼ばれる崖面には、約一・三kmにわたって七五〇窟もの石窟が開鑿されている。そこには様々な形態・構造の窟があることは確認されており、一定の分類もされている。

仏教石窟が、仏像などを拝むための「祠堂窟」と、僧侶の修行の場である「僧房窟」とに大別できることは、中国やインドに存在する石窟寺院の研究からも明らかに

なっている。バーミヤーン石窟も例に漏れずであるが、一つ一つの窟がそのどちらとして使用されたかまで言及した研究はほぼ皆無である。また、窟は単体で開鑿されているものもあるが、複数の窟が集まって窟群として存在することもある。この両者では、石窟の利用の仕方は異なってくると考えられる。

卒業論文では、研究史を振り返った上で、まずバーミヤーン石窟に存在する窟の一つ一ひとつが祠堂窟か僧房窟かを判断することを第一の目的とした。その結果を踏まえ、それらの窟から成る窟群が全体としてどのように利用されたか、バーミヤーン大崖の地区ごとにどのような特徴が見られるか、という点について明らかにすることを最終的な目的とした。本論文が分析対象としたのは、破壊された石窟や情報が得られない石窟を除外した、計四四窟群、一四八窟であることをここで断っておく。

〈問題の所在〉

バーミヤーン石窟の調査・研究は一九二二年のフランス隊を端緒に、世界各国の研究機関により行われてきた。日本からは京都大や名古屋大が調査を行っており、その結果をもとに分類・編年が組まれている。

その際に分類基準となつたのが、石窟の「①平面形式」、「②天井形式」、「③移行部の形式」の三つである。平面形式には八角形、正方形、円形、長方形が、天井形式には平天井、ドーム天井、ラテルネンデッキ（方形組み上げ天井）、クロスヴォールト天井、ヴォールト天井とがある。移行部とは、石窟の壁と天井とをつなぐ部分のことで、スキンチやコーニスなど多種多様な種類がある。この基準で初めて分類を行ったのは名古屋大の建築史家、小寺武久である。建築史家であるため石窟の構造的な部分にのみ焦点が当てられ、他の要素は基準には含まれていない。石窟の種類については祠堂窟と僧房窟とが存在することは明らかなのであるが、一つ一つの窟がいったいどちらに当たるのかという判定は為されて

いないのである。この分類基準は最新の調査・研究でも用いられているが、やはり構造的な部分に注目されており、機能を判断するための基準は設けられていない。

#### 〈分析〉

上記で見たように、これまでの基準のみではその窟の機能（祠堂窟か僧房窟か）を判定することはできない。祠堂窟か僧房窟かの判断には、新たな分類基準を設ける必要がある。祠堂窟の特徴としては、ニッチ（仏龕）があることや、概して華美であることが挙げられる。対照的に僧房窟は、僧侶が生活・修行する場でもあるので、簡素な造りをしていることが多い。そこで新たな分類基準として、「①仏龕の有無」、「②壁画の有無」、「③立体的装飾の有無」とを設けた。祠堂窟は仏を拝むための場であるため、仏像を安置していた龕（仏像は破壊や盗難を受け残っていない）の存在は判断の大きなヒントであるし、壁画や実的な意味を持たない装飾は、祠堂窟を華やかに

するという意味で分類基準になり得る。

また、分類基準の中でも優先順位をつけた。例えば、ニッチの存在する窟は、仏像が安置されていたのだからほぼ間違いなく祠堂窟であるが、立体的装飾の存在だけでは祠堂窟であるとの判断は困難である。他にも、ニッチは一度掘ってしまえば後世まで残る可能性は非常に高いが、壁画は上塗りや剥ぎ取りが比較的容易である。現に、壁画の下から古い時代の壁画が見つかった例が報告されている。従来の建築的な三つの分類基準に、新たな基準を加え、更に窟自体の大きさ・規模なども考慮に入れ、総合的に判断を行った。

#### 〈結果〉

対象とした窟の全てを祠堂窟、僧房窟のいずれかに分類した後、窟群ごとに集めた結果、窟群の構成にはいくつかのタイプがあることがわかった。このタイプに名前をつけ、それぞれについて概述する。まず、祠堂窟単体で存在する窟（Aタイプ）であ

るが、これは窟群を構成しない比較的大規模な祠堂窟である。祠堂窟の特徴である分類基準、ニッチ、壁画、立体的装飾のいずれもを持つ場合がほとんどである。次に、複数の僧房窟の集合からなる窟群（Bタイプ）で、これは大小様々な僧房窟からなる。最後に祠堂窟と僧房窟が組み合わさった窟群（Cタイプ）である。これは最も数が多いタイプであるが、その窟群を構成する窟の数から、C1（窟の数が六つ以下）、C2（窟の数が七つ以上）の二タイプに更に分けることができた。

#### 〈考察・結論〉

バーミヤーン大窟はその窟の集中から、大きく七つの地区に分けることができる。これは小寺も行った地区割りをもとに、新たな窟の発見も含めて改めたものである。地区の説明とそこに存在する窟群の特徴は以下の通りである。

1地区…バーミヤーン大窟の東端、東VI窟群からG窟までの地区

— AタイプとBタイプが存在する。1地区は非常に窟群の役割が特化していた地区であったことがわかる。

2地区…東大仏の東側、F窟群からB1窟群までの地区

— C1タイプが多いが、Aタイプも存在する。Aタイプは東大仏以東全般に多い。

東大仏地区…東大仏の足下の三五窟群、西大仏地区…西大仏の足下の五三窟群

— 規模は違うが、東大仏地区と西大仏地区は非常に良く似た窟群形態をもつ。大仏を中心に祠堂窟、僧房窟が巡らされている。

更に、ニッチの奥壁には祠堂窟の八角形窟が、西壁には円形の僧房窟が、東壁には正方形の祠堂窟が二つ設けられているという点も共通している。東大仏は西大仏に時代的に先行するため、西大仏は東大仏を参考にして造られた可能性が大いに考えられる。

3地区…東大仏の西側、C窟群からE窟群までの地区

— C2タイプと少数のAタイプが見られる地区である。この地区のC2タイプの祠堂窟は

総じて規模が小さいので、祠堂窟としてのAタイプとそれに付随するC2タイプという構図が読み取れる。

4地区…両大仏の中間地区、K窟群からI窟までの地区

— 規模は様々であるがCタイプの窟群がほとんどである。この地区の窟群は、単一窟群内で石窟寺院の役割を果たしていたものと考えられる

5地区…西大仏の周辺、Z1窟からXⅢ1窟群までの地区

— Bタイプが多くその窟群としての規模も大きくない。西大仏地区の規模の大きい祠堂窟に付随する窟群の集合と考えられる。

分類を行ない、考察によってバーミヤーン大窟にある窟の一つ一つが祠堂窟なのか僧房窟なのか、またそれらの窟によって構成される窟群がどのような性格をもっているかがわかった。また、それをもとに各地区にどのような窟群が多く見られるか、考察をおこなった。

バーミヤーン石窟には祠堂窟単体で存在する石窟、祠堂窟を中心に僧房窟が付随する窟群、僧房窟のみで構成される窟群がある。バーミヤーンの石窟は窟群単体で役割が完結するものではなく、複数の窟群が関連し合って利用されたのである。その好例が、西大仏地区と五地区の関係である。五地区に祠堂窟を中心とした窟群が少なく、僧房窟が多く見られることは前章でも述べた。このことから、五五mという高さを誇る西大仏を中心として、当時僧侶達が西大仏の周辺に僧房窟を造営したということが考察できる。多くの窟群の要素が重層的に合わさって、一つの「バーミヤーン石窟」という機能を果たしていたのである。

仏教石窟という流れの中でバーミヤーン石窟を捉えると、その特異性が浮かび上がる。まずは大仏の存在が挙げられる。人を模したものより明らかに巨大な仏像が造られたのは、バーミヤーン以西、以南では見られない。仏教石窟発祥の地であるインドでさえ出現しなかった大仏が、バーミヤーン

に至ってようやく登場するのである。またバーミヤーン以东の大仏と異なり、バーミヤーンでは大仏の仏龕内にも石窟が営まれている点に特徴がある。だからといって大仏龕と足下の石窟群で機能が完結することとはなく、Z窟群やXⅢ1窟群のような僧房窟のみで構成される窟群が組み合わさって存在するという構図も、バーミヤーン石窟に特有なものである。

バーミヤーン石窟が非常にバラエティに富んでいることも繋がるが、バーミヤーンにおいては窟の造営に画一性が無かったこともわかる。ある程度の流行する窟形態はあるが、これほどまでに自由な平面形式、天井形式、立体的装飾、壁画、ニッチの配置のされ方を持つということは、窟の造営の際に厳しい規則があったわけでは無かったと言える。バーミヤーンという国際色豊かな土地だからこそこのようなことが起こり得たのである。

〈展望〉

バーミヤーン大崖の正面の溪谷にはかつて、石窟の造営と時期を同じくして都市が存在していた。その事実は、玄奘三蔵の記述にあることで知られていたが、近年の発掘調査・物理探査などでも明らかになっている。今回取り扱ったのは石窟寺院のみであるが、その土地における仏教の信仰のされ方を知るには、地上寺院との関連を考えることが必要不可欠である。今後調査が進み地上寺院址が発見され、より深化した研究が期待されるが、そのためにもアフガニスタンという国の情勢が落ち着くことを願うばかりである。